

才3号発刊に寄せて

和英、英和の翻訳プロセスを問わず、講義内容はすべて同一かという点、まったく異なっていることに驚かされます。つまり、材料が同じであつても、受講者の翻訳レベル、性格、体験などのほかに講義者の講義時期や体調が複雑に絡み合つて、出力内容が違つてくるということなのです。とくに私の場合は、この傾向が強く、この講義録と東京のテープを比べみてその感も今更なほ強めています。しかし、この事実は当り前といふは至極当り前で、それでこそこの講義録に意義があるのであり、実際に受講を待つ方はひとつひとつの記述に想いを馳せられるはずだし、また講義者としての私もそのその景色の中に自己反省と一さうの奮起を呼び出すことが出来るのです。ともあれ、本書はズッシリと重く、そしてまた作成者の愛惜が処々に漏ちています。徳永さんにバカう感謝します。

昭和61年4月

東京赤坂にて

水上龍郎